

『経済史——いまを知り、
未来を生きるために』

経済史は何を語りうるか

東京大学特任教授・
東京大学名誉教授・
放送大学客員教授

小野塚知二

Onozuka Tomoji



小野塚知二／著
四六判，598頁
定価4,400円
2018年刊行

二〇一八年二月に大慌てで刊行していただいた拙著『経済史——いまを知り、未来を生きるために』は、ありがたいことに多くの方々が目に止めて、さまざまな書評を書いてくださいました。今回、本誌編集部より貴重な機会を与えられたので、拙著を改めて読み返すとともに、書評で指摘いただいた点にも現時点で可能な限り応えることにしましょう。

拙著執筆中に、それが「『経済史』の決定版ではありませんし、「人文・

社会科学の俯瞰」の王道ではないこと」は充分に自覚していました（「あとがき」、五四〇頁）。特に、刊行時点でわたし自身の不満が大きかったのは、第13章「産業革命」でした。拙著中で最長の章ではないものの（最長は第12章「経済発展の型」で三八ページ、いかにも長過ぎます）、二六ページを費やして書いた割には、本当に書くべきことを書き切れなかったと感じながら脱稿しました。この不満足感の原因は明瞭で、二世紀に及ぶ産業革命

をめぐる先行研究の錯綜を整理することには頭が向いていたのに、本当に書くべきだと考えてきたことを充分に概念化できていなかったからです。つまり、端的に思考不足のまま書いてしまったことにあります。

したがって、刊行直後からそこを概念化することに自覚的に取り組みました。その過程をすべて辿るには到底紙数が足りませんが、最初の機会は二〇一八年一月一日に開催された小野塚ゼミ（横浜市立大学商学部／東京大学

経済学部)同窓会での講演「経済はこれまで成長できるのか——歴史から読み解くいまと未来」でした。そこで、わたしは、二〇世紀以降の農業は「肥料や農業の原料としての化石燃料(＝酸化されていない大量の有機物資源)に依存[しており]、現代農業は持続可能ではない」と話しました。実は、拙著も第13章(三一三―三四頁)や終章(五一八―五二二頁)で、同様の趣旨は書いているのですが、産業革命の技術的な変革には機械革命、エネルギー革命だけでなく、原料革命もあったと明晰に概念化することができずに、「原料革命」という概念を提示する手前で止まっていました。原料革命を概念化した最初の機会は、この同窓会の直後に訪れました。

東京大学の第一二九回公開講座(二〇一九年春季)「氣」の講師を仰せ付かりました。その講義題目の締切が同

年二月二六日で、わたしが決めた題目は「蒸気機関と化石燃料のその後——エネルギー革命、原料革命、大気温」でした。その年には、東京大学オーブン・キャンパス(八月八日)で経済学部の模擬講義の講師も担当し、公開講座と同じ題目で高校生向けにも講義をしました。さらに、同年一〇月一日には国連大学SDGs企業戦略フォーラムという場で講演をする機会も与えられ、「原料革命と化石原料のこれから」という話を、さまざまな企業でSDGsやESG投資の業務に携わっている方々に聞いてもらいました。翌二〇二〇年正月早々には、東京大学生産技術研究所の「文化×工学研究会」で、同じ題目の話を工学の専門家諸氏の前で披露しました。

明瞭な言葉になっていなかった頭の中の妄想を明晰な概念にして、それをさまざまな聴衆の前で話す機会に恵ま

れたのはたいへん幸運でした。こうした話芸の機会を経て、二〇二〇年春には雑誌『世界』に、「人類は原料革命から卒業できるのか?——温暖化問題あるいは産業革命観への一視角」を書く機会を与えられ、拙著で不満の残った産業革命論について文章で改めて考え直すことができました(二〇二〇年七月号)。さらに、その直後に『岩波講座世界歴史第15巻 主権国家と革命・15―18世紀』に「産業革命論」を書くようにとの依頼をいただき、拙著刊行後の産業革命をめぐる思索と言語化のとりあえずの決算をする機会となりました。同書(二〇二三年三月刊行)に収録された拙稿「産業革命論——欲望解放と自然的制約」で、人間の制限のない欲望が、近世に人間的・社会的制約から解放された後も残された自然的制約(端的に言えば土地・森林資源の制約)を、「過去の自然」(＝

化石燃料」と「他国の自然」(「食料・エネルギー資源の恒常的輸入」)に依存することで、一時的に先送りしている状態が、近現代の産業文明であり、それは持続可能ではないと論じました。

以上、産業革命については執筆直後から自覚的に概念化と言語化の試みを継続した結果、拙著を補完しうる論考を書くところまで到達しえたと考えていますが、それ以外にも多くの点をさまたげまな方々から指摘され、考え直さなければならぬところがあります。

*

第一は、拙著は西洋以外も対象に含んだ経済史たりえているか、拙著が焦点を当てている経済社会のモデルは西洋の経験に基づいているのではないかという指摘です。それは経済史という

学問の成り立ちに由来する問題です。

経済史とは一九世紀西洋に成立した比較的新しい学問ですが、その原初の問いの半ばは近代産業文明と資本主義経済とはいかにして成立しえたのか、その「成功の物語」を導き出す問いであり、残りの半ばは近代産業文明と資本主義経済のもたらした「豊かさの中の貧困・喪失」の原因を究めて悔悛に到達する問いでした。それら双方の問いに足りないのは、「他国の自然」と「過去の自然」に依存した欲望解放がどれほど特異なことを問う、もう少し時間軸が長く、しかも自然科学の諸分野にも開かれた姿勢です。したがって、経済史の現在の問いは、原初の問いの水脈に属しながらも、近現代産業文明と資本主義の何が持続困難であり、何をいかに継承しうるのかを問うことになるでしょう。そこでも産業革命は戦略的な要点ですが、それを単なる成功にも単なる悔悛にも単純化させず、産業革命を一国的ではなく世界的な現象として描くことが必要です。この点について、詳しくは、拙稿「経済史概説書はいかに読まれるか?」(特集 歴史を書くということ(第五回) 概説書を書くということ) 歴史学研究会編『歴史学研究』第一〇五八号、績文堂出版、二〇二五年二月、二八(三三頁)を参照してください。西洋中心モデルが不適当だからといって、西洋以外の何かに依拠すれば西洋中心史観の弱点が解消できるというようなことではないと考えています。

また、西洋以外の諸地域に注目するなら、(1)ボメラントの「大分岐」以前に分岐があった、つまり西洋と非西洋は大分岐以前から非対称であったのではないかという問いと、(2)近代化と産業化が順調に並進するという「明るい」命題を相対化して、むしろ人権・

自由・民主主義などの近代の諸価値に欠落があっても、産業化は旺盛に進展するという事実をいかに説明するかという問いの二つに結び付くでしょう。

後者の問いは資本主義の多様性・多経路性というテーマに関わることであります。

第二に、前近代の段階区分や前近代社会の変化の動学が不明瞭であるとの指摘も頂戴しました。拙著は原始共産制、貢納制、奴隸制、封建制といった前近代の生産様式を類型的な概念として提示していますが、それが何らかの段階的な変化の論理を内包しているとは論じていませんので、マルクス『資本制生産に先行する諸形態』や大塚久雄『共同体の基礎理論』よりも理論的に後退しているのではないかとの不満を与えたのだと思います。しかし、前近代の諸生産様式に関する先行研究は方法的に高度に西洋中心主義的なモデ

ルですが、現実の前近代社会はそうしたモデルで概括できないほどに多様であったとわたしは考えています。わたしたちが先行研究に依拠して認識できているのは、そうした多様な前近代のごく一部にすぎないのだとするなら、可能なことは以下の二点であるというのがわたしの現時点での立場です。(1) 多様な前近代社会の段階論的な把握の可能性は将来に留保したうえで、前近代社会は剰余（収奪された剰余と民衆的な剰余の両方）を非生産的に用いるメカニズムが組み込まれていたため拡大再生産や資本が発生しにくい社会と、そうしたメカニズムが解除されて、一瞬の成長軌道に乗ってしまった社会とに二分可能で、後者は短期間（おそらく数百年ほどの時間）で森林資源を枯渇させて滅亡し、近世以降に存続しえたのは前者である（すなわち現在のわたしたちは例外なく前者の子

孫である）という生態系あるいは進化論的な認識方法を仮説的に確保しようでしよう。(2) 多様な前近代社会を仮に段階論的に二分できるとするのなら、それは封建制と諸他の生産様式との間にあり、封建制に到達した社会では高い確率で、それを基盤にして資本制が生成しうるといのが先行研究の精髓だったのではないかと認認です。二〇世紀にヴィットフオーゲル、ヘイナル、トッドらが発見したヨーロッパ内部の東西区分もこの認識に接合可能です。この点は、大塚久雄著／小野塚知二編『共同体の基礎理論 他六篇』（岩波文庫、二〇二一年二月）の編者解説でもやや詳しく論じています。第三は「労指関係」という概念に関してです。拙著は、人間の際限のない欲望は、経済活動の効率性を求め、それは分業を必然化し、分業が効率的であるためには現場で働く者たちと彼ら

を指揮命令する者たちとの間の支配・

被支配は固定的な関係として確保され

ざるをえないと論じ、この支配・被支

配関係を労指関係（ないしは労支関

係）と呼びました。目に馴染んでいる

「労使関係」でも「労資関係」でもな

く、「労指関係」という造語を用いて

いることについてさまざまな反応を頂

戴しました。本誌二〇一八年九月号で

は斎藤修先生が、「著者独自の「労

指」関係という概念についてです。こ

れは本書全体を貫く歴史観と深く関わ

る重要な提案なのですが、いまのここ

ろ三箇所（四二、一六二、三三七頁）

でそれぞれ独立に——分業論、協同性

論、そして労資・労使関係論との関連

で——論じられているので、これだけ

では受講生にその重要性を認識させる

のが難しい。著者の提案は、私の理解

では次の三つの問題に関連します。長

期的な趨勢としての官僚制化（ウエー

バー・テーゼ）、近現代になって顕著

となった企業組織による市場の代替傾

向、そしてそれが労使関係・労務管理

へ与えたインパクトです。それぞれが

一節を充てるに値する大きな問題です

が、最初の二つは問題の所在すら明示

されていない。節に相当する長さはな

くとも、それぞれについてまとまった

歴史叙述があつたらよかったと感じま

した」と指摘してくださいました。産

業社会における労使関係や資本主義社

会の労資関係はいずれも労指関係の現

象形態にすぎず、およそ人類の共同作

業（すなわち組織）にとって最も根源

的な社会関係は労指関係であるという

のが、わたしが意図したことですが、

斎藤先生のご指摘の通り、読者にはま

ったくわかりにくい仕方では造語を使っ

てしまいました。この点についても話

芸と作文の機会を与えられ、拙稿「見

果てぬ夢としてのアソシエーション

——協同性、労指関係、瞬時の意思疎

通」（『専修大学社会科学研究所月報』

第七二一号、二〇二三年七月、二—

八頁、[https://www.senshu-u.ac.jp/~ofl1009/PDF/geppo2023/721/snr](https://www.senshu-u.ac.jp/~ofl1009/PDF/geppo2023/721/snr721.pdf)

[721.pdf](https://www.senshu-u.ac.jp/~ofl1009/PDF/geppo2023/721/snr721.pdf)）を発表しました。

これら以外にもさまざまな重要な「

指摘をいただきました。拙著の改訂版

を書く機会に恵まれたなら、それにつ

いてのわたくしの思索と応答を盛り込

んでみたいと考えています。ただし、

現行の拙著よりは長くないよう心

掛けます。請うご期待。

※『経済史——いまを

知り、未来を生きるた

めに』の詳しい情報は

こちらから。

